

# 進路を考えるきっかけ作りや、 大学・学部研究の選択の幅を広げるために、 “GAKUTAN”の判定結果を活用

## 東京都 海城中学高等学校

高校第一学年 主任 小澤 嘉康先生(左)  
高校第一学年 福島 俊和先生(右)



海城中学高等学校は、開校から128年の伝統を誇る完全中高一貫制の男子校です。都内有数の進学校であり、例年、医学部をはじめとした理系進学者が多い点が進路の特色となっています。早くから、「新しい人間力」として“対話的・協働的な能力”を、「新しい学力」として“課題設定・解決能力”を教育カリキュラムに掲げ、多様化した価値観とグローバル化の波が押し寄せている昨今の社会の中で、自ら考え、主体的に動ける生徒の育成を推進しています。



### —「進学適性検査 GAKUTAN」(以下GAKUTAN)は、 何年生を対象に、いつ頃実施されましたか？ また、ご活用の目的は？

**小澤先生** 高校1年生全員 320名を対象に、5月の中間試験の初日に実施しました。本校では高2から文理コースに分かれますが、そのため高1の10月から12月にかけて文理選択を行います。最近の生徒の特徴として、教師が「自分で考えて文理を決めなさい」と言っても、なかなか決めにくいという傾向があります。そこで、外からいろいろと刺激を与えるための取り組みを行っています。その一つが「GAKUTAN」の実施です。

高1での進路学習の第一段階として、まずは進路を考えるきっかけ作りのため「GAKUTAN」を活用します。

また、例年、7月に東京で開催される大学進学志望者向けイベント「夢ナビライブ」(文部科学省後援。本年は6月に開催 ※1)に、高1生を参加させているのですが、どの講義や大学の説明会を受けるのかを、「GAKUTAN」の結果も参考にして決めさせます。そのために、事前に生徒に結果が返るように、5月に実施しています。

「GAKUTAN」は、自分で見えていなかった自分を見ることがもできます。自分は理系だと思っていたけれど、検査の結果で法律や経済も向いていると出るケースもあります。結果を見て、自分が考えていなかった分野に適性がでていたら、その分野の講義も見てくるように予定を立てさせます。それによって、自分の選択の幅が広がるというこ

とにつながるのです。

### —他にも判定結果を活用した場面があればお教えください。

**福島先生** 本校の場合、「GAKUTAN」の判定結果の活用方法は、基本的に各担任の裁量にまかされています。私のクラスの場合は、「夢ナビ」が終わったあとに二者面談を行い、その中で判定結果についての話もしました。まだ1学期なので、文理選択の話のきっかけに利用したという感じでした。教師用の一覧表を準備して、面談に臨みました。

その後、6月の終わりにかけて保護者面談を行いました。そこでは判定結果を見せるということはしませんでした。生徒たちも、進んで保護者に見せることは少なかったようでした。

### —判定結果を返却した際の、生徒さんの反応はいかがでしたか？

**福島先生** 生徒たちは皆、に食い入るように見っていました。おそらく、今まで、自分の能力を項目立てて判定されたことがなかったからだと思います。また、学問適性については、これまで知らなかった具体的な学問分野については、数値化されることに新鮮な発見があったようです。考え通りの判定結果がでたらうれしいでしょうし、違っていたら「なんでだろう」と思ったり、逆に受け入れられなかったり、いろいろな反応がありました。基本的には結果が出てきて評価されるということに対し、生徒たちは楽しんでいるの

